

今夜だけスーパースター

草間 小鳥子

ミュージシャンにとって、チャンスはほんの数回だ。一度きりのこともあるし、一度もないやつだっている。そのチャンスをモノに出来るかどうか、ヒットするかしないかの違いだと、ぼくは思う。

デビューして5年。いまだツアーどころか、週間ヒットチャートに食い込めたことさえない。ぼくは限界を感じていた。こんなばかげたウサギの耳とシッポなんかつけて、タンバリンを叩きながら夢や希望を歌っている場合じゃない。週に五日、深夜のコンビニでアルバイトをしている。ぜんぜんそんな場合じゃない。レコード会社から愛想を尽かされるのも時間の問題だ。ショッピングモールのミニライブでわんぱく坊主にお尻をけっとばされながら、ぼくはため息をつく。夢や希望を歌って励ましてほしいのは、まったくぼくのほうだった。

「きみの歌はね、影がないんだよね。明るすぎる」

シヨッピングモールの控室で、垂れたウサギの耳を伸ばしながら、ぼくはマネージャーのお説教をきいていた。

「明るいのはいいことだと思っただ、うん。でも、なんだな、空回りってやつ。ほら、ちよつと不幸くらいの方が共感を呼ぶだろう？ 人の不幸は蜜の味ってね」

たしかに、共感される曲じゃないと、聴いてもらえない。でも、不幸な歌なんて、この世に飽きるほどあるじゃないか。ちよつとくらい、100%幸せ！ 生きてるってラッキー！ って歌があってもいいと思っただ。でもたしかに、さっきのミニライブはさんざんだった。シヨッピングモールのお客さんたちは、タンバリンを叩き歌い踊りまくるぼくのことを、不景気そうな顔で見つめ、通り過ぎた。つまり、時代にあっていないんだな、ぼくの歌は。ため息をついて、垂れたまんまの耳をリュックにしまった。

そんなとき、「チャンス」はやってきたんだ。

夜。ぼくは、CDを聴いていた。記念すべきぼくのデビュー曲。信じてきたはずの前向きな言葉が、ぼくの胸にすうすうと穴をあける。ためしに、ウサギの耳をつけておどけた顔を試してみる。ああ、もう限界……。

その時だった。玄関のチャイムが鳴った。ぼくは耳を疑った。だって、夜中の2時だぜ？

チェーンをかけたまま、ドアの隙間からそっと顔を出す。

「どなた？」

外廊下に広がる濃い闇の向こうから、かすれたような声が響いた。

「バンジーラビットさんですね？」

はっとした。町を歩いてたって、間違ってもぼくに声をかけてくる人なんていなかったのに、こんな真夜中のアパートで、ぼくの名前を呼ぶ人がいる。うれしくなって、ウサギ耳をつけっぱなしのことも忘れ、ドアを開け放った。

で、すぐに後悔した。そこにいたのは、コウモリみたいなぶかぶかの黒いレインコートに黒いつば広のハット、先っぽのトンがった黒い革靴を履いた、見るからにあやしいやつ。ところがその”黒ずくめ”は、声を震わせ、信じられないことを言ったんだ。

「バンジーラビットさん、あなたは我々のスーパースターです！」

このぼくが、スーパースター！？

「たしかに、スーパーマーケットでライブをしたことならあるけど……」

ぼくの言葉をさえぎって、”黒ずくめ”は、ぼくの両手をがっちり握りしめ、こうまくしたてた。

「あなたにお会いできる日を、ずっと待ち望んでいたのです！ まさか、この世にいらっ  
しゃったとは……！」

最後の方はむせび泣きながら、黒ずくめ”は握った手をぶんぶんと振った。ぞっとす  
るほど冷たい手だ。どうも話がおかしい。ぼくの曲が大ヒットしたただなんて、きいたこと  
ないぞ。

「あのう、人違いじゃないかな。たしかにぼくはバンジーラビットだけど、別のバンジ  
ーラビットじゃ」

言いかけたところで、黒ずくめがかすれ声で歌い始めた。

— きみの居場所はここじゃない。どこかでだれかが、きっと待ってる。さあ、飛び込  
むのさ。いまか、いまか、いまか、いまだ！

ロズさんでいるのは、ほかでもない、ぼくのデビュー曲だったんだ。

「さあ、仲間が、バンジーラビットさんを待っています。ああ、夢のようですよ！」

夢のようなのは、こっちだよ。あまりにも急な申し出に、

「こんな時間だし、明日、マネージャーに伝えるよ」

と言ったが、黒ずくめは譲らない。

「三万人の観客が、今か、今かとあなたを待っているんです。さあ、どうかご一緒に」

ぼくはあわくってシッポをくっつけ、タンバリンを握った。三万人！？ さあ、さあ、どうながされるままアパートの廊下を進む。いつもの廊下が、ずいぶんと長く感じられた。いや、廊下は本当に、闇の向こうへ、ずっとずっと続いていたのだった。

「足もとにお気をつけくださいね」

だんだん垂れてくる耳を直しながら進むぼくに、黒ずくめがささやく。

「万が一よろめいたりなんかしたら、『まっさかさま』ですから」

何が「まっさかさま」なのか、聞く気にもならなかった。人気まっさかさま、ランキングまっさかさま、売り上げ……。

足がくたくたになってきたところで、ふっと目の前の闇が晴れ、こつせんとドアが現れた。振り向こうとするぼくの背中を黒ずくめがぐいと押し、ぼくはドアの向こうへ転がり込んだ。

途端に、頭をがっんと殴られたような衝撃が走った。歓声だ。張り裂けんばかりの怒涛の歓声が、いっせいにぼくに浴びせられている。スポットライトは、まっすぐにぼくを照らしていた。そこは、コンサートステージだったんだ。

「うそだろ……」

呆氣にとられてあたりを見渡す。ドームのような天井までびっしり詰まった赤いビロード張りの椅子には、ひとつ残らずお客が腰かけている。強いスポットライトとフラッシュのせいでほとんどお客の顔は見えないが、立ち見席までばんぱんだ。

鳴り止まない歓声に戸惑いながらも立ちあがると、歓声はひとときわ大きくなり、あられのような拍手が降ってきた。

なぜこんなところにコンサートホールがあるのか、いったいなぜこんな深夜に三万人ものお客が集まったのか、というか、まずなぜぼくがこんなに大人気なのか? 「?」がたくさん浮かんできたけど、ぼくはぶんぶん頭をふり、タンバリンをたたんと打った。

「こんばんは、元氣100%、バンジーラビットです!」

なんといいっても、ぼくはミュージシャン。ステージに立ったからには、全力で最高のパフォーマンスをするのみだ。

「ポジティブ光線ビビビ!」

ぼくが片手をピストルのように突き出し、ホールの隅から隅まで弧を描くと、なんと、ウェーブが起こった。

— さあ、飛び込むのさ。いまか、いまか、いまか、いまだ！

サビのコーラスは、お客全員が声をそろえて歌った。最高の夜だったよ。のどがカラカラになるまで歌いきって、二十回のアンコールに応え楽屋に引っ込んだぼくは、なおも鳴り止まない拍手を背に、ぐったりと椅子に倒れ込んだ。興奮した黒ずくめが駆けよって来る。

「バンジーラビットさん、ありがとうございました！ ああ、最高の夜でした」

しかし、次の言葉に、ぼくは耳を疑った。

「明日の夜も、お迎えにまいりますね」

「明日もまた、こんな夜中にコンサートかい？」

「ええ、我々魔物のゴールデンタイムですから」

魔物！ ぼくは口をつぐんだ。拍手はまだ鳴り止まない。まさか、会場いっぱいのお客も、目の前の黒ずくめも、みんな「魔物」？ ぼくは、そっとウサギの耳に触れた。

きっと間違えたんだ。このふざけた耳とシッポのおかげで、ぼくもあいつらの仲間だと勘違いされたんだ。

『まさか、この世にいらっしやっただとは……』

黒ずくめの言葉がよみがえり、ごくりと唾を呑んだ。それとは気づかず、黒ずくめはすすり泣きながら喋り続ける。

「いや、我々のこの頃の曲といったら、甘っちょろいものばかりで。ポジティブさが足りないので。バンジーラビットさんのようにおどましく明るい曲は、なかなか作れるものじゃありません。胸が抉られるようで、涙が止まりません。『希望』だとか『夢』だとか……」

はっきりとわかった。魔物の世界では、価値観が違うんだ。曲がポジティブであればあるほど、魔物たちは悲痛に受け止める。つまり、人気が出るんだ。例えば、ぼくらがちよつとばかり不幸な曲を好ぶようにね。なんてこった。耳が垂れる。

「せっかくだけど」

ぼくは、かしゃんとタンバリンを置いた。

「今晚限りで引退するんだ」

そう告げると、黒ずくめは絶句し、息をひゅうひゅうと吐きながら何か言おうとしたようだったが、真後ろにばったりと倒れてしまった。よっぽどショックだったんだな。

ぼくは黒ずくめをまたぎ、楽屋のドアを開けた。闇に覆われた廊下が現れる。垂れた耳



をとり、しっぽをおしり、うつむきながらしばらく歩くと、そこはいつもと変わらない、ぼくのしけたアパートの前だった。

そして本当に、引退した。

そりゃ、スーパースターには憧れる。あのまま魔物の世界で歌い続ければ、もっともって人気が出て、こっちじゃ味わえないような素晴らしいミュージシャン生活を送ることができたかもしれない。たった一度のチャンスを、ぼくは棒に振ったわけだ。

でも、と電車に揺られながらぼくは思う。ぼくは、夢や希望を伝えることで、たくさんの人に少しでも幸せな気持ちに、楽しい気持ちになってもらいたいんだ。遊園地の控室でパンダの着ぐるみへ袖を通し、これでいい、とぼくは思う。歌じゃなくても、夢や希望を伝えることはできるからね。

デビューしたもののまったく人気が出ず、ひっそり引退したミュージシャン「バンジーラビット」。そのデビュー曲が、ある大物女優のファン宣言でたちまち人気に火が付き、動画サイトで数億回再生の大ヒットとなるのは、その翌年ことだった。でも、ぼくは生活を変えなかった。二度目のチャンスにも、手を出さなかったってわけだ。ファンなんて、気まぐれなものさ。

それにおおかた、その「大物女優」、この世の者じゃないんだらう？

(了)